

生き証人として 次の被害者を生まないために

木村 瑞穂



私は現在、「新型コロナワクチン」によって健康被害にあった患者による「新型コロナワクチン後遺症者の会」の代表をしており、私自身もその一人です。会は 2021 年 12 月に発足し、2026 年 6 月時点の会員数は 1500 人を超えています。

流行当時の報道と社会的な風潮

新型コロナワクチン（以下、SARS-CoV-2 ワクチン：87 頁「医学的観点から」参照）の効能については「95%の効果」「発症予防効果」「感染予防効果」と大々的に謳われ、「救世主」のように扱われていました。「ワクチン接種を広げることが新型コロナウィルス感染症制圧の鍵」（日本免疫学会 HP より）として、“集団免疫”獲得のために社会全体で接種をしなければならないような空気が瞬く間に広がり、非接種者は冷たい視線に晒されました。接種しなければ仕事をさせてもらえなかったり、接種した人だけお得になる旅行のキャンペーンが行われたり、海外からの入国時にはワクチン接種の有無が隔離指標の一つとされました。

一方で、健康被害の声は当時ほとんど報道されていませんでした。とはいえ、私も接種前に、ワクチン接種で命を落とされた方の報道を 1 件のみですが目にした記憶があります。そして当時は、その報道を知って「接種したくない」と思っていました。

接種を決断した経緯

私は、電車で約一時間の繁華街に通勤しており、夫は地元で自営業をしています。COVID-19（いわゆる新型コロナ）が蔓延し始めた 2020 年、夫の仕事仲間が感染し、2 週間ほど入院した出来事がありました。一時は昏睡となり、目覚めるまで周囲は気が気じゃない日々でした。毎日毎日感染者数が報道され、著名な芸能人が感染後に他界したことが大きく報道されました。感染の恐怖が身近な問題となるには十分すぎる出来事でした。

「自分の仕事のせいで夫に感染させてしまったら」

「昏睡状態や、最悪の事態になってしまったら」と、強く心配する日々が続きました。当時政府は、SARS-CoV-2 ワクチンの「感染予防効果」を強く謳っていたため、迷惑を掛けたくないと接種を考えるようになりました。

しかしながら、接種券に同封の説明書には“これまでのワクチンでは使用されたことのない添加物が含まれている”という記載がありました。しかも、報道などで最悪の副反応として「死」があるとも知りました。感染の恐怖と天秤にかけて、どちらが最善なのかが分かりませんでした。

そんな最中に、ワクチン担当大臣（当時）と人気 YouTuber の対談動画が流れてきました。「ワクチンを打てばそもそもコロナに感染しない」「発症予防効果は 95%」「10-11 月にワクチンを打ち終わるとかなり落ち着くかも」「2 億回打って亡くなった人は 0」「そんなに心配することではないと思います」。そしてリスクについての情報は「デマ」だという。

私はその動画に安心してしまい、接種をする決断に至りました（この動画は、2024 年 7 月 30 日に非公開となっている）。

さまざまな症状の発現

SARS-CoV-2 ワクチンを接種したのは 2021 年 7 月下旬と 8 月下旬、当時 35 歳でした。はじめに症状が出てきたのは 1 回目接種の 1 週間後。ホットフラッシュと動悸、更年期障害としてよく聞く症状でした。2 回目の接種時に問診医にこの症状を強く訴え、「本当に大丈夫なんですか」と何度も質問しましたが、「大丈夫」と言われるのみ。

今思えば、その時なぜ接種をやめる判断をしなかったのかと悔やみます。実は、“医師がとめない限り 2 回接種はしなければならない”と自己解釈していたのです。後日、1 回目接種でやめていた人の存在を知り、「そのようなことができたのか」と絶望したのを覚えています。